

仏壇と日本人

「あの世」と「天国」

『天国』というよりも『あの世』のほうが馴染みます。それはおそらく多くの日本人が同感する所だと思います。では、以下に私見を述べていきます。

「国」は、領域や境界線（国境）があって限定的なイメージがあるのに対して、「世」は大きな広がりを感じさせます。世界、世の仲（世間）、来世 等々… それは、世代交代などの言葉にあるように空間だけでなく、時間をも含みます。つまり「この世」「あの世」は時空を含んだ広がりです。そして、「世代」、「世間」のように、大まかな区切りはあっても、境界線や範囲が曖昧なのが「世」です。

ですから「この世」と「あの世」をきちんと区切るためには、そこに川（三途の川）が必要とされるでしょう。それは、1本の線をポンと飛び越えるのではなく、川という帯状のものを渡ってたどり着きます。「川」という明確な区切りを入れつつ、境界線自体を帯にすることで、「越える」ではなく「この世からあの世へ渡る」という緩衝帯の意味合いも持たせている絶妙な場面演出と考えます。

仏壇に語りかける日本人のアイデンティティ

川を渡るという行為自体にも、大きな意味合いがあります。手っ取り早いのは、泳いで渡ることです。しかし、幅の広く流れもある川です。衣服を脱いで裸（身軽）にならないと渡り切れません。つまり、富や名声など不浄なものやしがらみを一切捨てるということです。よって出家主義の小乗仏教では個が主で、他の人々との関わりはあまり重視されません。

己を見つめるだけでは独善的に陥りやすい上に、自分しか救われません。川をひとりで泳ぐのではなく大きな船に乗ってみんなで渡る…大乘仏教においては、在家信者、つまり出家していない信者も、彼岸に渡れるとされています。自分自身がこの世で厳しい修行をしなくとも、すべての人を“慈しんでおられる仏”の功德（恵み）によって、私たちは救われる、と考えるからです。慈悲の心を持って生きるなら、その功德によって私たちが仏になれる、そしてお彼岸には念仏することで、あの世から故人が還ってくる…これが日本人の仏様を敬う慈悲の心と考えます。

大乘的な和の思想…自我を表出しない、合理性を求めず曖昧さをよしとする…日本人の国民性は、仏教者であろうとなかろうと、背景には宗教的な歴史文化の影響を受けているように思えます。仏壇に手を合わせ語りかけることは、キリスト教徒であっても日本人ならよく理解できるどころです。また、日本人には神仏習合影響から、死をケガレと忌みる神道と極楽浄土の仏教思想が同居して、独特の死生観を持っているようです。神社・仏閣こだわりなくお参りする慣わしも同様に、曖昧さを示すものと言えそうです。涅槃に故人は逝かれ、墓にお骨があって、家に仏壇がある。故人の魂の居処は一体どこなんだ？…欧米人には、理解しがたい矛盾も日本人は曖昧性をもって全てを包み込みます。仏壇は、死んでも同じ家の中で魂は過ごす同居の証です。身近にあって、家族を見守り続けているのです。これは、日本独特の家制度（家督）とも関係します。先祖代々から継ぐことで、宗教も個人（自我）ではなく家として継承してい

くのでしょうか。

「日本人はその自我をつくりあげてゆくときに、西洋人とは異なり、はっきりと自分を他に対して屹立しうる形でつくりあげるのではなく、むしろ、自分を他の存在のなかに隠し、他を受け入れつつ、なおかつ、自分の存在をなくしてしまわない、という複雑な過程を経て来なくてはならない。」

(河合隼雄『大人になることのむずかしさ 子どもと教育』岩波書店)

我が家に見るグリーフケア(喪失悲嘆ケア)

1月に義父が亡くなり、続けて3月に義母も逝ってしまいました。続けさまに大変です。義母の死は予告されていたものですが、義父は突然です。つまり義母の死が先と誰もが思っていたのです。義父については、義母のリンパ腫が再発して入院した際に、ひとり暮らしとなってしまう心身が弱っていきました。そこで療養型施設に入って一旦は元気になったかのように見えたものの、ある日突然気分が悪くなって病院に搬送されました。搬送された時も意識はしっかりしていて、2週間ほどで退院できるだろうと診断されました。ところがその日の午後2時ごろから意識がなくなって、9時過ぎに逝ってしまいました。あっという間でした。突然の夫の死と迫ってくる自分の死の狭間で、義母はどんな心境だったのでしょうか…

長男夫婦に子どもが生まれなかったため、家は途絶えることとなりました。ですから義父は生前から知恩院での永代供養を望んでいました。義父の葬儀と四十九日を済ませましたが、義母は初盆前に納骨することを嫌がりました。「納骨してしまうと、おじいちゃん(夫)が、家に還ってこれない」と言うのです。(実際には仏壇や位牌がなくても、霊は生前に生活していた場所(自宅)に、家族に会いに戻ってきます)

また、私の妻は納骨の当日に突然、「分骨して我が家に置きたい」と言い出しました。(妻の家系の外に骨を置くには、後々代々の扱いを明確にしなければいけません。納骨当日に言われ、困惑してしまいました。

これらのことからわかるように、残されたもののグリーフケアには、家(血族)に癒され、家に護られているところが大きいのです。そして、その拠所は形あるものに、故人の霊が込められています。それがお骨であったり、仏壇・位牌であったり、遺影であったり、形見であったり、お墓であったりするわけです。それらを通して故人を偲ぶことで、癒されていきます。ですから、墓と骨と仏壇と位牌の関係性(魂の居処)や本来の意味は、あまり問われないのです。(戒名とは釈迦の弟子になる名前。浄土真宗においては他の宗派と違って、死後すぐ仏になるので戒名を刻んだ位牌は本来必要とされませんが、望む人も多いと聞きます。仏壇に形あるもの、つまり位牌がないとすっかりいかないようです。)

3月、無事に義父の納骨を済ませた後、その僅か4日後には義母は寝たきりの状態になってしまいました。結果的には、納骨はぎりぎりセーフのタイミングでした。そして、安心したかのように、後を追うようにすぐに義母は逝ってしまいました。5月16日に四十九日、翌17日納骨を済ませ、涅槃で仲良く暮らしていることでしょうか。そして今現在、我が家には、おじいちゃん、おばあちゃんのお骨(分骨)が仲良く並んでいます。